

羣書類從

四百八十八

庫文閣内
三五六八 和

内閣文庫		
番號	和	18690
冊數	666(616)	
函號	215	3



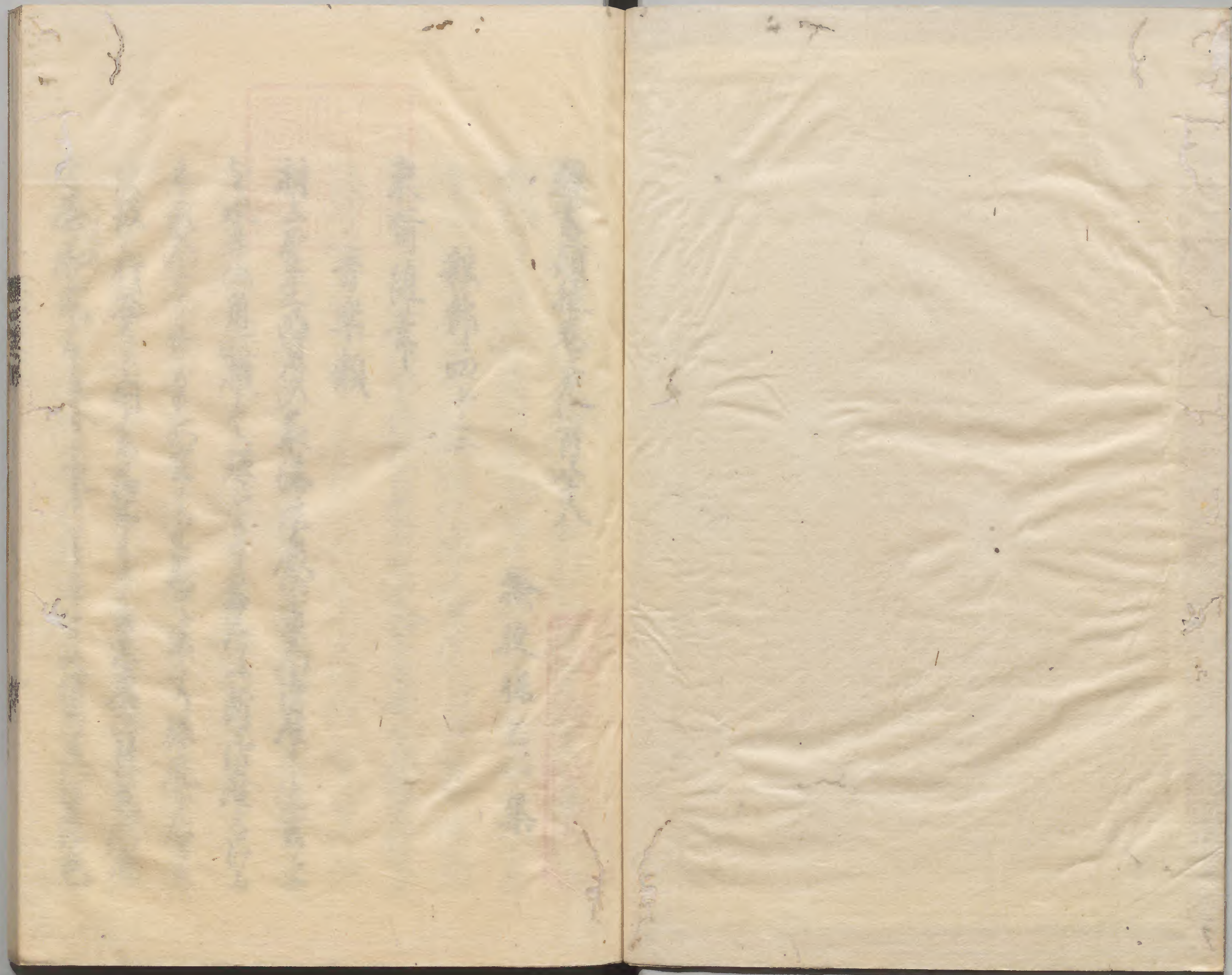
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





釋書類後卷第百八十八

淺草文庫

檢校保己一集

雜部四十三

東齋隨筆

音樂類



村正堂主の月の本流原殿の書乃法座より云よ
む水牛の角は撥とて彈とまのあたりに新法座をけり
月歌乃まろけりるの空よりと我て幸より孫庇を居る
只彼之行爲より同くわ法座より云大唐の琵琶乃持
士廉承武の唯今云法座を孫海より支けつるに法座也

刊次郎

卷四十一

乃授者のいふはる悉くすも亦也其行皆貞敬の授抄
したる曲入の授抄をいふ事す重々威威の氣色
なる御書巻をとりてしめ給ふは世に授抄す
一尋ら唐帝民の御書一貞敬の二給内とて
中より授抄の物度の上と云右上の曲を授け
しり

承和遣唐使揚政以貞敬と云妙善院入道相國を
はりて吾祖所寄書令と信とまると云上の書と江
中細き人の御書と云るを授けしり以延書と云
云上の書おとてしる書巻引のひとてしる書と云

平善院の宝藏も此給と云苗の唐云乃苗也唐云此
湖を渡り河海中に船沈むとす舟人等後々の財物と
海に入らば此の財物沈むとす舟人等沈む
無為の者等とす後々の舟人等金子あを能く給
多お賜さんと思と云金銭沈むとす舟人等財物
出ると云と云金と書と云返と云苗也書信教書と
是れは舟の苗を買と云給ひと書信教書と書ら
是れは舟の苗を買と云給ひと書信教書と書ら
竹添臣とて書信と云給ひと書信教書と書ら
云云此の書と云給ひと書信教書と書ら

吹おけしむを流たりけるに案中... 若くは... 如光やと云也の音ハ加也

放鷹樂云云生保の西遷已藤只一人を侍たりけり

白河院盤石行楽明後日ありと云る東山階寺の三面

侍りありける今夜は... 侍りありける

待るる西の案中... 入るる... 是も是也

放鷹樂... 云別房の内入る

侍の樂を授けり

堀河院の清和南院侍従と云く大段若丸清盛種

と行進する西遷北中... 生保と清和をわ

せりける花と調子を替り吹し流るる西遷調子

にふれりたる西の鐘を揚る事と云上ありと云せ居

て北侍成下付と云西遷屋上も流き作す初はく

着子... 流るる... 吹けり

に... 吹るる... 流るる

を... 吹るる... 流るる

吹流るる放鷹丸と名付るる侍り... 侍り

今ハ振劬西遷清りの... 侍り

建坂の蝶丸ハ式部卿敦實親王の難多之旨目と

成り流るる侍り... 侍り

宇多天皇御子

井ノリイ

博雅の三位 延喜御孫克明親王子源氏也 是は流泉啄木の調曲と云ふ

たり教實親王管弦の名を述べて是より採九の智を

まきまきほめて採るる也と云ふことと育目の産巻引

ことら地也なり

博雅の位の筆譜の真書云古楽の威楽自序

始く六帖の平らと云無の落涙予指世と生まると

不の筆の生る強万秋末也元朔の仲の盤渉

調殊勝樂の中より万秋末神妙也博雅の調子

是は世末氏好むようく林率外院の生するようく經

信郷社よと云ふ

博雅の位月のあつとけら来坐存と朱菴門のた

の存く流泉の曲は吹の連に因るも小車衣着る男

乃笛と吹あつとけら離るる心とあつとけら笛は

此世もたつとけら目出くはつとけらあつとけら

よつとけらあつとけらあつとけらあつとけら

と云ふ事なりあつとけらあつとけらあつとけら

本は月夜もさう彼人の笛はあつとけらあつとけら

あつとけらあつとけらあつとけらあつとけら

生後程く月のひよるあつとけら行合く吹まはしとあつ

笛はあつとけらあつとけらあつとけらあつとけら

甲三信うせく後法つ世箇はとて時箇次もいふせ
 らられも其妻を灰あつてい入るらうて後法飛と
 云間出たし箇吹あつてうらとて吹きうらとて信とを
 らうらとて信とて法つ感し後世箇のよま兼若門の介と
 まくえとていけりうらまけ法飛彼所より吹き信
 正法とて世とて月の表作のてうけりて行て世箇とて灰
 けり被門の棲の上まらうて大寺ある處とて獨逸
 物とてはわくけりうらとて奏しとて始と鬼の箇と
 知食しうら兼てと名有て天下并の箇とて後法
 て清堂入道殿は物とてうらとていけりて宇治殿平兼院

ところを法とて時法法飛と納らとていけり世箇のよま
 兼二ありて正赤とて若し胡とて鬼とていけりれ
 正赤後反り免しけり時とてあ兼法とて鬼とてうら免
 と兼家入る反とてせ法けりてと箇の皇帝國
 乱旋作子荒序とて正法とて正曲とて具とてうら正
 する方秋樂のよま信也箇の實物とて兼兼二大水
 龍とて正頭焼雲とて免とてうらとて各由法とて
 とて正法反兼正とていけり箇とてうらとて信とて
 くとも内とてある箇人とて被箇とて信とて法飛と
 正法あるとてうらとて正法とて兼兼とていけり

是後より二女を心夏納さるるに正統元年に奉さるれ
けりとのふと云ふ也と云う

藤青殿女御 徽子女王武部御 重明親王一女 と申すは正統元年に沙門

宗道より入つて居りたるものける秋の夕暮を参ると目出と

引給ひたまはるといふまじりてせ給ひて沙例よあはれ

多建しく入るありも思わたりてせ給ふと引給はまきと

いふ秋の月ありあはれき給ひ女御は秋夕月のまらふ

まゆり引たりと後よりせらありとて沙集の侍より

ひみこりし

是に後院の正統元年に頼通 隆王春宮を奉ら 頼宗

納養利まらふと云ひて自出よりとていふは隆王に

たかくあはれありと云ひて正統元年に藤原の侍より

さるるといふと云ひて自出よりとていふは隆王に

らゝと申すは頼通と頼宗の御名に人うとて

あはれとて藤原の侍より正統元年に藤原の侍より

正統元年に引給ふ今よりいふは藤原の侍より

亦揚るるといふは藤原の侍より正統元年に藤原の侍より

正統元年に藤原の侍より正統元年に藤原の侍より

あはれとて藤原の侍より正統元年に藤原の侍より

ともいふは藤原の侍より正統元年に藤原の侍より

いふくあつらむとせ法てくう諸事の法除かぬ
はつてをえうらあつらむ其のき北の政不少くむは
かき法をれたて後とみ法とくひらむとくあつらむ
毒を治すもあつらむ法除の後もあつらむとく
ひらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむ
ら世世の人とくあつらむとくあつらむとくあつらむ
来るこころとくあつらむとくあつらむとくあつらむ

草木部

南殿の傍とくあつらむ梅の木也桓成天皇遷都乃き
種くる木也仁明天皇承和年中枯矣とくあつらむ梅の

木成改りうらむとくあつらむ後天徳に壬午九月九日東院焼
亡とく造内表の河成初姫重明親王の家け橋と移す
種くる木也仁明天皇承和年中枯矣とくあつらむ梅の
木とく造初以木け世地橋と名く亂の終とくあつらむ
實方中將奥州とく向うとく秋杭とくあつらむ毎日
國の神法強迫とくあつらむ或日あつらむの仏とくあつらむ
とくあつらむ國人とくあつらむあつらむとくあつらむ國中にひて
とくあつらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむ
一人進出てとくあつらむ若くあつらむとくあつらむの仏とくあつらむ
とくあつらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむ
とくあつらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむとくあつらむ

うそおれは陸奥の國をいまだ出陣の國と別出さす
 ぬがよあつる勢也兩國をさすはく後つおれ松と出陣の
 うそおれはあつる威くゆしやけり亦奥別と高浦
 さつとさうく水菜に回集さく有力なるかつてん
 うそおれさうおれら國のさつひにさつてさうおれさう
 うそおれ

二条三位平経盛の家を移れりさうく笑ける時源
 と位が政うおれあつとさうさうと東海さうてされ外
 うそおれつるさつひにさうけさつとさつひの侍候と位
 夜中つるさつとさうけさつとさうさうつるさつとさう

口をさるさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 後日夏の次ふさおれあつとさうさうさうさうさう
 事よさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 秋成さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 うそおれ

一東院沙阿臨内家の祓樂実方中物達希して
 掃蕩の花を賜へて追て舞はかりさうさうさうさう
 進ぶるさうさうさうさうの枝を折てさうさうさうさう
 由人さうさう感歎さうさうさうさうさうさうさう
 吳竹の枝を用さうさう

天曆の清野も清涼殿の清野の橋の末まで
 しての末までとせしむるはあつての末に
 するもその時承りていと京はあつてあつて
 して西京乃とさつてける乳もさつて
 殿さつてけるつらもとて殿のありの末
 にはさしひかへてあつてはさつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて

勅されしはあつてはさつてあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて

是と貫之の娘は恒所也けりは猶ほ
 する哉とてあつてあつてあつて

拾遺集巻五 勅をまの奉りしははつてあつて

良岑公世子

前橋入の事お中とせしむる末はあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて

子の振神の西京の橋もさつてあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて
 してさつてあつてはさつてあつてあつて

因らば藤之藤系の姓と流の由可紀成の人名
といはる藤の掛のるは枯るの如く今も能る氏と
うせらるるころころのまじりて流もしをさつた也

橋幸通と云人則光朝臣ののふ陸奥國よりして竹
隈の松と云と傳りける

よもやふみ松の二本は松人のいふとまのいふとまの
傳ふ赤光幸通と改成すといふ傳り

たも隈の松の二本と云とまのいふとまのいふとまのいふ

鳥獸類

法堂園日殿法成寺法はくも流もし日と云ふといふを
はくもひを以て白犬と名とて相成ひころ法堂へも致
日正法は幸のける或白門と云うせありまうけるは前ふ
すみくもをいふころとびるはくもと云ふはくも法成寺の
はくも幸ありといふ松を松まひいせむと云ふ犬を幸なり
欄と云ひて列と云ふはくもといふも松ありといふと編
はくもは死を掛くわたりて去陪應明朝臣と云て
子細と傳りて時應明と云うて暇と思惟と云ふ氣
まうくと松を法成寺と云ふと云うる者厥物をと道す
據てころをまじりてのまじりて傳へ合流連のいふまじりて
白犬と云ふは白也のいふと木と云ふ神通のいふまじり

として生所とて居らざるよしと云ふ事合せて是
 等の紙を留めしめて十五をたしむるに女嬭出せり
 清明の中よ此樹のさるるたる秘本也清明の外
 ありしものありし但道法匠の本を其人を
 知ししとてその事をも出でてその形を知りて
 兎をよみへたおと方とて自ら書しりて南をさ
 して飛りまわるとの落しとて此本を獻樹ののり
 佐所とて知ししとて中を道法匠の被るのよし
 有りしをよみしりて自ら書しりて南をさ
 河本院のがらうとてその事をも出でてその形を知りて

すふそらとて居らざるよしと云ふ事合せて是
 等の紙を留めしめて十五をたしむるに女嬭出せり
 清明の中よ此樹のさるるたる秘本也清明の外
 ありしものありし但道法匠の本を其人を
 知ししとてその事をも出でてその形を知りて
 兎をよみへたおと方とて自ら書しりて南をさ
 して飛りまわるとの落しとて此本を獻樹ののり
 佐所とて知ししとて中を道法匠の被るのよし
 有りしをよみしりて自ら書しりて南をさ
 河本院のがらうとてその事をも出でてその形を知りて

大納言行成卿いまま殿上人とて居らざるよしと云ふ事合せて是
 等の紙を留めしめて十五をたしむるに女嬭出せり
 清明の中よ此樹のさるるたる秘本也清明の外
 ありしものありし但道法匠の本を其人を
 知ししとてその事をも出でてその形を知りて
 兎をよみへたおと方とて自ら書しりて南をさ
 して飛りまわるとの落しとて此本を獻樹ののり
 佐所とて知ししとて中を道法匠の被るのよし
 有りしをよみしりて自ら書しりて南をさ
 河本院のがらうとてその事をも出でてその形を知りて

行成らくるすして至る度月となりては射とせしめ
 こせとて其一行後人と思ふはらもあはれや一乳
 罰とあひしるも其故とてしきまのふりてはとて
 實方二六歳の入とてさきけの折も至止小部より
 津賀とて実方は呼の者らんとて中將とてとく
 秋捲とて集連して陸奥守とてふつとつと
 まされはつぬふとてあうせまうり實方益人
 もあひしるもあはれけらとてあうせまうり實方益人
 殿止の小ま盛盛とてあうせまうり實方益人
 あり

延長聖王御衣のよす蠅の一居りけり
 て作らばとて世とて無下の陵連とてあはれ
 末の成もさうかたうりもあはれ
 六束の南室町の東一町とて孝之三位鞠親とてあ
 うり母後の天橋とてまはいて池の中橋とてさ
 けり出て小松茂うりうりさうりなれり
 新らしき林の枝とてあうりうりさうり
 ける女あひしるもあはれけらとてあうり
 かなもさうり射の秋とてあうりうりさうり
 うりうりてあうりうりさうりうりさうり

此も男がすまふはまてえらうとひびく
まらうらうらうとまらうらうと
かたうらうらう

人事類

高野天皇崩遷都云大納言白壁王はめて皇太
子より一宮を右大臣吉成朝臣長真俊の天皇と
乃清源長親王の子後二位文室源之美人をきて
太子とまむとて左大臣藤原永子左中女藤原百
川ありまると白壁王はまてえらうとひびく
祖源之真人の因縁云とらうと吉成朝臣其弟系

藤太市真人をまむとて白壁王はまてえらうとひびく
乃白壁王はまてえらうとひびく
百官のあやうとひびく
長久寺亦先帝の御子あり太子とて定らる由被
吉成朝臣大納言藤原永子とて定らる由被
天皇の位よりまむとて白壁王はまてえらうとひびく
顯基中納言の後一宮院の寵也とて定らる由被
正月十七日崩遷都云大納言白壁王はめて皇太
子より一宮を右大臣吉成朝臣長真俊の天皇と
乃清源長親王の子後二位文室源之美人をきて
太子とまむとて左大臣藤原永子左中女藤原百
川ありまると白壁王はまてえらうとひびく
祖源之真人の因縁云とらうと吉成朝臣其弟系

打茂供する人なり。子細成く。怨月。皆新王の吏勤
 仕とし。云世まを。まて。たら。も。ら。な。教。か。す。る。た。ら。さ
 向楽天の壽古。墓。行。せ。入。不。知。姓。名。右。化。為。通。傍。土
 年。く。皇。系。生。と。批。詩。を。咏。け。り。亦。あ。く。れ。罪。受。し。て
 此。不。乃。有。を。と。ん。と。名。の。西。の。り。大。原。の。り。位。し。て。往。生。せ
 且。法。若。因。昨。生。治。後。大。系。の。り。結。て。唐。家。と。し
 予。せ。給。て。終。東。法。也。彼。の。り。今。生。お。事。と。は。し
 云。中。出。る。世。ま。を。け。り。世。治。後。道。世。を。と。ん。必。引。等。
 後。下。あ。ま。し。て。曉。更。の。帰。信。し。ら。る。ん。
 暖。織。市。清。河。無。惡。善。の。り。け。る。落。書。の。り。世。お。か。

見。ま。ら。る。り。け。り。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 け。也。清。門。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 ま。い。の。り。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 せ。れ。の。り。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 せ。せ。給。て。是。後。の。り。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 月。夜。の。り。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 とも。の。り。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 不。も。の。り。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 け。れ。の。り。世。ま。を。と。ん。あ。く。と。う。ら。ん。じ。の。り。た。の。り。思。ひ。ん。ん。
 世。終。る。り。今。集。り。被。入。不。か。の。後。也。

卷四百八十八

廿

近頃時社氏人多く菊室長めりしやまらるる私教
 菅原のりきく人きくまたりしや社司のりきくを
 るり計らるる世にうきく出家して大承山に住
 けりし中後日野外心と云断りしや方丈龍と云假
 名もく書きたる物も出家の後中のとく神教の寄
 人といひききりしを後名神院より作り建てるれり

志保のりきく合しりしや清原と云せりきくし清原のりきく
 と云つるのりきく世にわらるるやまらるる

天曆所今橋直轄の民初大補と云りける中と云り
 けりし書く小島道見は清原と云せりきく主中清原と云せ

らまけるふ依人而事異種仙偏顯代天而授官職
 無運余をく述懐の初書しりせるものや清原と云り
 るものや人長安と云りしものや其後内裏焼くものや
 りしものや中院のりきくをせりきく代に侍りたるは信
 子時簡云象於藤山下りてまじりしものや清原と云り
 直轄のりきく文のりきくしりきく清原と云りしものや
 志保のりきくしりきく

忠義公の清子用院大将胡光と云りしものや清原
 乃堂と云りしものや後鳥羽の外と云りしものや好後と云りしものや
 の水精のりきく冠のりきく教のりきく此殿のりきくしりきく

ちりあふくたけきにつくはつりぬるあつた世に
 貞徳のしるし初日の光あけぬきあひてくる自雲文
 やんちる今自雲運たれと珠くひ人もあひて伝
 伏見を後理の聖後徳とあまこいさ治國白後の清子
 と申伝達ともさやうなぬまふせして後徳も橋の後
 遠ら子とあまこいさ橋の姓あまふせして後徳も
 清子もく徳永の姓よりつるわして重衣もいふこれ
 傳りてくるや

近江も有徳とあまこいさは後二重院のまこと清子
 とあまこいさも徳永の顯徳の子とあまこいさも清子
 まひてあまこいさ清子とあまこいさは後二重院のまこと清子
 くら米

清康の履掛らふわのこもあまこいさは清子とあまこいさは
 鳥羽院の清子のあまこいさは清子とあまこいさは清子と
 清子とあまこいさは清子とあまこいさは清子とあまこいさは
 清子とあまこいさは清子とあまこいさは清子とあまこいさは

詩歌教

後二重院恒吉社も清康もあまこいさは清子とあまこいさは清子と
 清子とあまこいさは清子とあまこいさは清子とあまこいさは清子と

清子の清子とあまこいさは清子とあまこいさは清子とあまこいさは清子と

當座の秀歌也さう師つ後後松の長もよひて
まじりて古今集に入らぬ姫の歌也

よみられ松を秋風吹くふと云ふも
此歌を任大匠の大饗せん日西藤の松門の歌
中門の中へ入る史生の養ふもよみられ後松を此
作如行彼法歌もつくとさういふは松も古今の歌
よみふらうとして限るてまじり任大匠のよみ法作の
大納言とて名も有るて南階より行るものなり
對座のむねんさう好むと云師つらういふもよみ
お行るさうとて感氣もさう又自歌して云ぬ姫

家集の可なる中も彼松を秋風のよみおふ年閑
たる胡人の錦の帽子さうさう尺八の巻をさう
雲煙の松足もさうとて積茂謙さうとて子暇さう
る松也い人もひひとあそむはさう我具付風
の可さうとてさういふ松も
都良香竹生さうと清さうけりて眼もさうとて
三千世界眼前畫

と云ふは作る其末と案待さうとてさう菅天龍宣
とて

十二因縁心裏宣

と一句とくはつ給ふりけし

同人羅城門の若はるごとく氣舞風抗新柳發
と蘇一たるはこれ梅の上よりおろきて氷消波洗舊
若鬚と有るけしは良由菅送相の沙前と蘇
哉自款しつれは平井の鬼の初也つと作らる
能宣入道困元任家守實經つとあひく彼國よま
けるふ夏初日之友照のそく民の款あつとつと神
と和款つとつれは物もつとつとつとつとつとつとつと
由國司類つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

天儀も是書つて大なるも降して拵る植系押並く

蘇も物もつと

侍賢門院公實印女の中層はかきつとつとつとつとつとつと

か蘇よつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

ふつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

らせつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

加賀と云けり云々大江雅致載集入の
和采式部男の大成を以て采布報を請て
る采の飛を云々

物志て沢のなつとも我身もあはれなる事々
と採てくれ沙社の中ふあつる事々
はつななるも落る滋はとあつる事々
うねる事々

齊名双言等と試らば秋未出詩境と云事
と作らばはつる事々詩文章按變駒過系詞
海賊船乗落斬とつる事々先後中

書と云ん事々所小自字大切也と後作は白
駒景和乗聲とあつて秀句一定の事々其後
とものわけり事々勸給と事々恩同と事々
字々更不忘却と云けり

政道類

延久吾改と先恙物と作事々資仲御入
て事々法と事々外と事々也と事々沙
折と事々法と事々法と事々未と事々穀倉院
と事々及上と事々庭と事々貫首と事々
出納と事々格和
して小舎入と事々量と事々本米と事々

畏て持系らざるれば敷範もろく勅封成也とて
 とうに持信の許きくはつとて逃ける解置らざる
 損を差ひおぼはらざるなりて二まの末は恐
 く穀倉院よりて國々の末を以て納中進より仍行ねよ
 石室成用也件是石等子今穀倉院よりとら
 延喜の清門常よえとてなりけり此成いまわら
 なる人は物ひよりておとけありきとてつとてな
 びくは物のひとて逃るは大小まきとていりありとて
 作らざるなり

佛法類

大藏冠の家は城國宮治郡と科村陶尔とあり
 大匠之身病る時百法の后法めとて入る病哉
 一とて入る法とて因縁の時維摩經を信長とて
 病を癒すこととて入る法とて大長の家は神の堂
 とてて維摩經を講とて同疾とて講をたると
 大匠の病よふこととて入る法とて毎年世經とて
 一とて治癒とて世とて入る法とて陶尔の家は堂とて
 命長の家はとて入る法とて真福寺とて入る法とて
 のふつとて亦藤原寺とて号する也長國とて入る法
 大願とて教とて不空罍宗觀音像并聖天王像と

造ると用院賜土改大匠を嗣と弘仁元年南円
 堂とてまゝ觀音像と安曇とて西より法花會とて
 大匠乃法佛事也十月十六日の三日法花會とて
 ありて自らも也後お國麻田庄と其料不せり
 大宰寺は天平元年道慈律師所光皇の遺部とて
 て造ると大唐の西水寺の結構を倣て道慈法師
 しく法花會の西水寺は祇園精舎に倣て作る祇園
 精舎の現率此内院と福多とて大宰寺は此の火
 造大宰寺といふと大和國添上郡桑城石京と六条三
 坊とあり

孝謙天皇法花寺を建とて法花塔婆とて
 八角七重ふ博くはとて大匠永手に塔
 せり然り時永手に八角のまゝは八角七重と
 造るとはありて國土の賣とてはとて
 法花のまゝと造らる大匠の公平法とて中は
 ありて後生を責とて銅の火乃檀氏抱とて
 中後永手に息男後位上藤原家依病患の
 阿名徳の信氏禱とて教日加持せしむ或日信氏
 永手にて云我ま先永手也法花寺の塔婆と
 中減とてまゝとて眞遂とて銅の檀氏といふと天平序

ありとありと炎魔と宮の香烟蓋の満り瑛玉の
 やり終りて眞宮のありたる眞宮の日本國の罪人
 永年の息無る家依病のありて一僧を以て加持を
 しむ件の信堅固の信心を以て己の命に代りて
 と祈禱して効驗ありと志乃甚深のありてお相
 乃來重なる也いかにいかに思ふ苦慮を以て
 同朋九餘人引率して天上の生きたれ由成つて心
 こゝろの来りて也といふなり

宇治及平等院を建てるに於ては地取の事ふと
 兼合を以てまじりたる土師の在府を以て侍らざる
 宇治及信を以て云大門の便宜北向のありて人の便あり
 於ては向の大門のありたるなりや古府中に行きて云覺
 悟せしめし時を匡房辨へまゝ眞宮を以て江府と
 ておけるは後車のおもく具を以て建てるに於て
 ありて也といふ所のまじりたるなりといふなり
 ありて匡房の云は向の大門のありたる寺の天竺の
 寺唐土の西明寺を以て六波羅密寺也といふなり
 宇治及大を感へり也

後朱雀院の法皇長文年中最勝禪源宗信が
 統法殊勝なり世河は天皇の場を視て云ふと云ふなり

外條入及に運成とす是よりして係泉南座法下
 と叙せらる其後よりして天の座を設けらるなり
 本条坊門の小西洞院の西の堂なるを正堂と号し
 件堂は任疎入道頼義奥州入信囚未たりきて後
 建定せり佛は等身阿保院也本義は仏をも造立し
 恭敬礼拜とせ給ふへ必訂寺給ふも口世にいら
 うまひを給ふり十二年乃る戦場もてて運成は
 ちあつ片身成まるとあひかゝりて皮子よ合ふ令指
 のちとたらげり件堂の上壇の下に埋めりて耳
 刺堂とらりこの正堂なるにむす年なり

栗田左大臣在衡文章生の時鎮る寺は春福寺なり
 正面より東れるまゝ禮拜をすなり十二に感つるは儀
 さままはころはひといひ礼をすす七反許といふまは
 この小堂の礼ねより前よりをたらむといふよりまは
 せりといふは礼をすまはひといふよりまはころに
 度は満ちる時北堂重なるうせぬ在衡奇異の心ありし
 湯作の信をといふなりとも病室の様り聊睡眠する
 写しきなり童子装束は天童のころよりして清張が中
 より出て来て在衡の云まはは宮の右大臣といふり歳々
 八十二あるころに後昇進雅意に任せたり左大臣八

十二の時彼寺より移りて云往日右大臣八十二のより市
 中宗も今既如所眺ゆつ又多其申に示し給く云
 宮と右大臣と云ふことありとも奉公の勞にありて左
 よりたすの余と云ふありて八十七歳之果て件
 歳薨逝と云ふは後彼寺の正面乃車宮と云ふ人進
 士乃同と云ふ

播磨國書字の性空聖人生方の普賢菩薩と
 云ふことありて奉成祈禱と云ふれ告る云生方乃
 普賢聖人といふは神崎の遊女の長者と云ふこと
 ありて云ひありて神崎といふは長者の家と云ふ事あり

もつ今京より下れ案あはれありて遊真乱意
 乃る之長者も様聖の居と轍と云ふ乱相子の上句
 ともたまたま禰と云周防むつと中なることわな風
 にわたりもりて信立を阿智入奇異の思と云て
 睡眠する阿長者忽ち普賢の形と現く其身の白
 髪とのまゝ肩より光と出でて道信を照す則
 徴女の言も多しと云ふことありて云實お母偏のたつたぬ
 必塵六秋の月と云ふことありて臨終まの波れたらぬ
 阿ありては阿聖人伝作志教とて感涙と云ふこと自
 ちを冥く時と云ふことありて女人の形と云ふこと周防むつ

つゝ成虫の腹を穿つと又井の形を現して法文を
 演ふ如き事数ヶ度重なりて速き物に於て
 件の長者俄に立ち用たざる輩人の所をひきよめ
 且外に及んで以て申逝去す何れも其の家をみても長
 者秘滅の言違宴奥をいひせりといふ書字よ
 二枚法陣を掲ぐる人もあり客入を察せし對面
 の言も又懐中に巻をひき取り客入云ふといふ
 を見せし客入もこれを見せし客入も慙愧して客入
 杯をもちて退去すといふ

大活室は清安余十八歳辰限るる病罹の藝文

身とたむかりて十八歳の春号術法を修して祈ふ
 うめむるある人の後、圖生官火有る已極む
 とすの言も官大、發動す伴も夜十のれ乃文
 もも明白なりといふも突と難治とて八の字と
 止る物もまたとてころ果て八午の法歳九月廿七
 日入滅しとていふ

周法室の世に疾風おとるに此の如くは清安所
 を製給ひて唯一人石松の菓子なる法陣中に入
 て大蛇の如く病者、法陣にまはれしを記して生を
 よらうとていふとせし客入も病者なるる病

をたたり清和より入らせ給ふに五乃輿のり
給ひて天皇等多由依りてつせ給てんをえ
あり

小野皇太后宮秋子後深泉院の后大一条関白の三女

也生年十三年本藩傳天二条関白息會見靜因信心よりたひて望

ふ法華經成更給て毎月一劫讀誦志給入るて

初より一且秋十六より八月まで治暦四年閏十

九日を后此夕帝前御清志給上りよりこの偏

小道心と教て之佛轉經の外は他事ありま

さす二条東洞院享よりこの門から最徳主經と書

寫志給ふ武時雲白俄も階々霹靂夜に入る皇太后

經と業を手に握りて歎ひて存るるごとくせらるる

即時雷ありて天降りり服は穿て經をん給ら

むりま紙は焼く文字はをりて清衣のりて世に

身いつても海にまじ法は揚るる志はまよりのり

く深くまゝの承元元年の飾を落して出家

ありて良真庵をて戒所とてまじつてひお世のを

書を入りより再ひ長秋の境の月夜に守性生の素

懐をひけぬのりえん
晴苑律師に攝戸國人真福寺法和宗也皇時

傍教の法孫守胡已講入上之親法也及之文殊乃
 化身といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 後書者といふも法孫として佛事成終く百信を法
 せらる傍の座といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 北傳昨者座といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 出家して寂那といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道

寺乃上網と号せり
 参河守大仁定基の春藏大生毎濟光と云人の子也
 出家して寂那といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道

内記慶後保胤の陰陽師貫衣忠行の子也博志の子と
 成て改姓とて空心出家は後世に内記聖人と云り
 惠心傍教の寺院といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 若しとて傍教を食と云は後と云り
 河内國といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道
 といふも亦不儀なる事ありて計へり以浄堂入道

まはしめて後世の責成に...
 日本^{字注}の^名後まいつと流く難人とも拂ひの...
 了及一の人名...
 なる也流...
 行幸...
 院堂の中...
 送...
 志...

~~~~~

書字の聖結縁種...  
 送...  
 志...

神道類

佐理の大貳任...  
 西...  
 別神の...  
 流...

美名をり日本書紀の所書に二馬社の歌よ六波羅  
と云ふ歌は世人筆跡也

此書之集云紀伊國うきりうて居止馬の歌に  
記ありひと臨ゆく人々ももて見て云振例  
いまも神の玉をてかく社もあつてもみ  
いふたてあつる神也されくも初御  
云ふみえりもまれば行山もあつても  
せんそ子計ありひ跪くはても行乃神  
とて越道の神をまじりてかくよみ

皇太子の御成婚の御事

經信卿日輪院の所八講を奉りて河内  
もく申車をひ不審をきりて河内  
式は信二位を尊せひてたり神は非礼  
若とていりて礼を承るふ似り

放生云行末に准をりて奉延之二年  
は大御之隆園をり初年許々重胡  
二年より平放蘇靴を改め

貞信公の法所小一奉りて宗像の神  
は洞院のうらればより車より  
乃降日の新よ大御を存りて



貞位に及ぶ形は神代より始りて終るる儀なり法  
位よりしてのち世に終りたる人言地も中世終るまで  
いふ不便なるに事とて神の位にありて中世を以て

禮儀類

清即位の時代は王上の若くは皇太子の應神天皇の  
清冠也礼服の御具として内藏寮におきおたる後三  
条院の清冠も目出しくあはせ給ふに事つ終り  
正自敬もけりし事

中原所遠撰傳守に侍りて知是院入る後一系して慶  
賀氏中けるも物と稱して二度ありまけり入道及中

門の連子より正自敬もけりし事  
よき事なる物と稱して二度ありまけり

系撰所載の多年沈滞して為居に仲物より位に  
後初秋奠入の上卿を勅仕り作法進退のり事ふ  
とて不便なる事とて傍人の回事とて所中成通に  
系撰として度より別なる所載の語より年来系撰居  
りて公事清冠却るめりて公食なる事を知る  
後世所載の通事よりいふに公事とて公事と云大廟  
に入ての毎事小同成通是は公事とて同じく後日  
人の通事よりいふに思ふに方よりして不便なる事と





よらまは法代のかたのまはひのまはひのまはひの  
二宗院法位師を以て保元元年正月廿日今年も  
内宴有公卿七人位位十一人又博くつこうせら  
る席は式部大輔永範書侍り歎け下権司舞  
法性寺園白是氏獻せらる舞始今年どうりさ  
女舞りたる是も通憲法師神社さくも舞は  
なうせ侍りせむらわ

好色類

二宗右のまはひのまはひのまはひのまはひの  
本通侍り或河右左のまはひのまはひのまはひの

うひのまはひのまはひのまはひのまはひの  
袂も袂花のまはひのまはひのまはひのまはひの  
春も春夜のまはひのまはひのまはひのまはひの  
秋風の吹度くまあるまはひのまはひのまはひの  
よ入なしたく下らまはひのまはひのまはひの  
まはひのまはひのまはひのまはひのまはひの  
まはひのまはひのまはひのまはひのまはひの  
おす方或人云小野小町世園は中向してはあて死を  
ひしやううへあひまはひのまはひのまはひの  
て云小野のまはひのまはひのまはひのまはひの

と云ふ事あり

聖子仲之白河院の正氣を他は異ふる事禁  
 中よりあつてあつていままは法儀危急の時に返出とい  
 るこれむとて既而回服の儀も於抱負して去去は子  
 時を後明の条入してや云帝者苑曹の例未嘗有  
 の事よいとてかく祈奉る事よとて奏勅言云例と  
 非なりとて始まらむとて作らる  
 道余阿闍梨は名徳の尊也正氣を御微妙よく  
 法儀の所安んずる心と教をさると云り他好まむ  
 乃今或時和泉式部丸而約て云合の後曉方日

因はれりまて法儀をさると云らるる事  
 一乃老翁を誰人かとおるる事よ病の云裁の云東西  
 明院印の傳る者也法儀の河楚を帝教を始とて  
 天神地祇とて々々神をさると云らるる事よ近き  
 ちつとて奉る事よあつてとて神をさると云らるる事  
 水もはつとてよみ給ふ事よ法儀神祇も法儀同なりと云  
 係とて世をさると云らるる事よ法儀のやとて法儀ありと  
 云とて法儀あり

小野宮右府実資公とて賢人の事と云りけり依  
 奉りて此の事とて女をさると云らるる事よ法儀の

前も井の下の女を法流ありと名有て集り汲り其  
 中に少なき女をとりて用事し招きて裁縫玉への字信  
 後山車共出給て侍所共雑仕の女らもあてよきを  
 携りて水鉢と汲りつゝこの件女も教へさせ給へるや  
 う水汲汲り招りあふ衆も其後水桶を捨て物り  
 集りてと信し汲り果して業のこゝろ招きあはれり  
 後日女共ぞも御座候へ衆も汲りしむるよふ事言  
 後の石見日侍取の女水桶合ひて汲りつゝと信  
 らしむれども赤面してやこゝろつゝと出給へり  
 衆人も汲りても振舞ひのなるといふれぬひもも感付

此後の法流女共の言も女子共通りつゝつゝと走出  
 てよきこゝろ地流つりけり或人亦汲りて車より  
 下てあはれ衆人の口もまひつゝと云はれり女人の喚  
 人ありとてつゝと入給へり  
 小一条乃が師太公の女村上の法流の宣耀殿の  
 女侍出つておぼろよふつゝとおぼろよふ肉氣流り  
 とく寝殿のびくく一宮よ法車共とよりの女共ハ  
 西宮の車共のつゝと給へりつゝと母屋の柱のゆゑ  
 中もよびつゝと一すりとあはれつゝと裁縫玉を  
 るよふつゝとよふつゝと世給へりつゝと侍つゝと



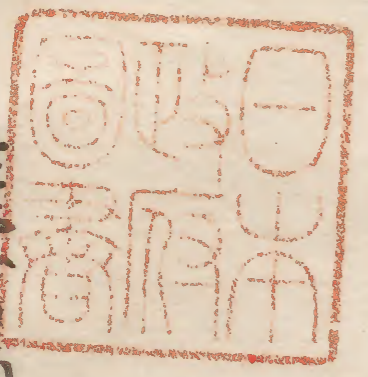
山乃紅葉錦をとりたるやうなるたれきつと白くす  
 くはまじりておくれぬうまはなうらむるきくわては  
 く徳と誠と書すうてそめて折うるを集く去  
 事やいふことなきにむしりひはりのせり  
 所堂友の下せ大おほくく道遠きとせ流し  
 作文の舟管管の舟和秋の船と日くも流てうは  
 道も持する人ことのもきとせむひく公任大納言  
 至系もける入る友う大納言いつ道の手事  
 うはくまきとあはれ入道と秋の船とるも作らん  
 の流てよとせりうくうく

小倉の風のせれ言をばいおまゐるもききあふく  
 大皆風一けり秋也みつしもあはれなる作文の舟と  
 うまじりておくれぬうらむるきくわては  
 う道も持する人ことのもきとせむひく公任大納言  
 至系もける入る友う大納言いつ道の手事  
 うはくまきとあはれ入道と秋の船とるも作らん  
 の流てよとせりうくうく

延長甲九

亦同融院大井河通遠の守公任の三般の...  
西行の初書河内為秋管院れ三葉成信入して...  
人々も方らのまこれけふ経信のれ三葉の...  
ふ海亂のあし...  
の三葉の...  
よせ...  
うよ...  
は...

右東齋随筆以古寫二本校了



羣書類從卷第四百八十八



卷四 百

三

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 十一、  
 十二、  
 十三、  
 十四、  
 十五、  
 十六、  
 十七、  
 十八、  
 十九、  
 二十、

内閣文庫

